


【実施報告】

いっしょに読もう！ いっしょに書こう！

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by  CORE

～米沢女子短大学生による取り組みを中心に～

北 口 己津子

1 はじめに

筆者の勤務校である米沢女子短大国語国文学科の「北口ゼミ」では毎年司書課程を履修する学生が多く所属している。そのゼミの取り組みの一環として、2018年より学童保育所で読み聞かせを行ってきた。公共図書館にとって児童サービスは重要な仕事になるが、読み聞かせ活動はその中心的活動となる。学生たちは児童相手に読み聞かせ実践することで、司書の仕事の実験すると共に、コミュニケーション能力の向上を図っている。

1-1 これまでの「読み聞かせ」について

これまで1年生の「教養ゼミ」では、まず前半は学内で絵本の持ち方や、読み聞かせの方法、絵本の面白さを学び、学生同士で読み聞かせを行い講評する。その後、実践として短大から徒歩約5分の学童保育所を訪問し、前半での学びを基に児童に読み聞かせ行ってきた。このことにより児童は、身近な地域ではあるが、なかなか機会がない大学生とのふれあいと絵本やお話を楽しむ時間を持つことができる。

ゼミの学生の感想としては、児童があんなに熱心に聞いてくれるとは思わなかった、また行いたい等、印象深い活動になっていた。

1-2 新型コロナウイルス感染症拡大下における「読み聞かせ」の課題

例年であれば実際にゼミ生と学童保育所を訪問して、対面で行っている読み聞かせだが、新型コロナウイルス感染症予防のため、対面読み聞かせの実施は自粛すべき状況となった。そこでリモートで行えないか検討を行った。その際大きな課題となるのは、リモートでの読み聞かせはインターネットを介しての配信にあたるため、公刊された絵本の読み聞かせは公衆送信権の侵害となることである。一方ゼミ学生がオリジナルのお話や紙芝居を作成すれば、著作権は学生になり、著作権である学生の同意さえあれば、公衆送信権の問題はないことも分かった。

2 リモート読み聞かせ

リモート読み聞かせとは、遠隔での読み聞かせを意味し、インターネットを介してウェブ会議システムを利用したリアルタイム方式（同期型・同時双方向）、スライド資料や動画等を随時又は期限が設定されているシステムにインターネットを介して視聴するオンデマンド方式（非同期型）を想定し、いずれもモニター越しで、読み手と聞き手は同じ部屋にいないことを意味する。したがって、今回のリモート読み聞かせに関しては、第一に公刊された絵本の読み聞かせの許可を出版社から得るためには、不特定多数に配信される可能性があるオンデマンド方式では許可が下りないと予想され、第二に通常対面で行っていた読み聞かせの雰囲気を読み手と聞き手の相互作用を重視する、この2点を満たすために、ウェブ会議システムを利用したリアルタイム方式（同期型・同時双方向）で行う方針とした。

2-1 リモート読み聞かせの現状と課題

ここでは、2020年8月時点でのリモート読み聞かせの実践例と課題について述べる。

対面での各種活動が実施困難になったため、対面が前提になっていた図書館などでの読み聞かせイベントも相次いで中止を余儀なくされた。ブックスタートに代表されるように、絵本などの読み聞かせ活動は児童・生徒や親の読書活動につながる重要な活動であり、公共図書館における重要な活動の一つでもある。読み聞かせ活動は継続性が重要であることから、小学校、図書館、学童保育所などの施設においては、対面ではない、すなわちリモートでの読み聞かせが試みられている。以下、インターネット上で紹介されているその実践例を挙げる（いずれのページも2020.8.28最終確認）。

- ①今帰仁村立今帰仁小学校（沖縄県今帰仁村）…6年生図書委員がモニター越しで読み聞かせ（2020.7.3）
<http://nakijin-sho.nakijin.ed.jp/archives/3214/>
- ②大津市大津東小学校…地域の読み聞かせボランティアが来校しモニター越しで読み聞かせ（2020.7.31）
https://es.higo.ed.jp/oozue/blogs/blog_entries/view/27/2777c0c130d07c37e4730a60dc429145?frame_id=33
- ③つばきの郷児童館（石川県野々市市）…学童保育所などと連携して小学生同士がモニター越しで読み聞かせ（2020.8.12）
<http://alice-japan.net/wp/jidoukan/archives/12488>
- ④国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）…入院中の子どもを対象に女優（南果歩）がインスタグラムを介して読み聞かせ（2020.5.21）
<https://www.jiji.com/jc/article?k=2020053000136&g=soc>

以上の例はすべて従来通りの公刊された絵本の読み聞かせをリモートで行っているが、①～③は読み手は聞き手と同じ施設内においてモニター越しで行われ、④は読み手と聞き手がそれぞれ異なる施設内に分かれ、インターネットを介して行われた違いがある。

公共図書館においては以下のような取り組みが行われている。

- ①石狩市民図書館「石狩市民図書館WEBお話し会」…図書館ボランティアサークルオリジナル作品を使った読み聞かせ動画の配信（2020.4.27）
<https://www.ishikari-lib-unet.ocn.ne.jp/html/readmovie.html>
- ②稲城市立図書館「おうちでどうぞ」…稲城市の昔話をボランティアが紙芝居を作成し、読み聞かせ動画を配信（2020.5.14）
<https://note.com/inagilib/n/na739dcf012eb#Rvtjh>
- ③美馬市立図書館「Facebookページ「リモートおはなし会」」…昔話のペーパートを図書館スタッフが作成し、Facebook上で動画を配信（2020.6.20）
<https://mimacity.jp/library/entry-409.html>

いずれもオリジナル作品か昔話を題材にした動画を図書館職員やボランティアが作成し、図書館HPやSNS上で配信したものであり、公刊されている絵本のリモート読み聞かせ（動画配信、リアルタイム配信）は卑見の限り行われていない。

以上のことから、リモート読み聞かせの現状は次のようにまとめることができる。

- ・公共図書館、小学校、学童保育所などにおいてモニター、インターネット越しでリモート読み聞かせが実施されている。
- ・公刊済絵本を使ったリアルタイムのリモート読み聞かせは同施設内、対象が特定された場合において、モニター越しで行われている。
- ・公共図書館では卑見の限り公刊済絵本は使われておらず、オリジナル作品や昔話を題材に作成された動画をHPやSNS上で配信されている。

また、モニター越し、インターネット越し問わず、公刊済絵本の読み聞かせはリアルタイムのみで、作成した動画のオンデマンド配信は行われていない⁽¹⁾。絵本読み聞かせに関する著作権のさじ加減は出版社によって異なり、詳細は後述する。

以上のように、公刊済絵本を用いた従来の読み聞かせをリモートで実現しているのは、対象が限定されたケースのみで、公共図書館のように不特定多数が対象のケースでは困難を伴うことがうかがえる。その際障壁になっているのはやはり著作権法上の公衆送信権制限にかかる問題であり、関係団体などが以下のように意見を表明している。

「読み聞かせ動画配信の著作権について

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、読み聞かせの動画や音声配信について、お問い合わせを数多くいただいております。

当館は現在、YouTubeで読み聞かせの動画配信を行なっておりますが、当館発行の出版物の中から、当館または当館の関係者が著作権を所持している作品を選んで行なっています。ブックトークに関しましても、ご紹介する作品については、各出版社より許諾をいただいております。

個人・法人にかかわらず、みなさまが同様の配信をされたい場合には、ご利用されたい作品の出版元へ著作権許諾申請を行うことが必要です。著作権者（作者）からの許諾なしに配信することは、著作権法上の公衆送信権侵害に該当します。著作権者の権利を守るために、お手続きくださいますよう、お願い申し上げます。」東京こども 図書館<https://www.tcl.or.jp/読み聞かせ動画配信の著作権について/> (2020.4.21)

日本図書館協会⁽²⁾としても、以下のような取り組みを行ったことをホームページで公表している。以下は図書館に関する情報ポータル「カレントアウェアネス」で報じられた記事である。

2020年4月24日、日本図書館協会（JLA）、日本書籍出版協会⁽³⁾ほか9団体宛に「新型コロナウイルス感染症に係る図書館活動についての協力依頼（公衆送信権等の時限的制限について）」を发出

新型コロナウイルス感染拡大下で、その社会的使命を果たすべく、創意工夫を凝らして様々な活動を行っている図書館への支援として、各図書館において通常のサービスが可能となり、当該図書館利用者の自由な外出が可能とあるまで間において、以下の2点の協力を求めるものです。

1 各図書館で所蔵された資料を用いた読み聞かせやお話し会を録音又は録画し、図書館利用者に対し、インターネットなどにより公衆送信することを、お認めいただきたい。

2 外出ができない図書館利用者への時限的サービスとして、利用者の求めに応じて行う当該図書館所蔵資料の文献複写サービスにおいて、その複写物を電子メールやFAXなどにより、図書館利用者及び病院等の公共施設等に送信することを、お認めいただきたい。」

(<https://current.ndl.go.jp/node/40852>)

その後「新型コロナウイルス感染症に係る図書館活動についての協力依頼（公衆送信権等の時限的制限について）」に5団体より5月11日に回答があった旨を、5月13日

の日本図書館協会はHPのお知らせにて公表した。

(http://www.jla.or.jp/home/news_list/tabid/83/Default.aspx?itemid=5306)

その内容は、日本書籍出版協会は著作権にかかわる許諾そのものは日本書籍出版協会として行うものではないとしたうえで、日本図書館協会が行った依頼事項の1に対して、日本図書館協会が率先的な役割を担うことを期待するという回答であった。この2点の協力要請について、日本図書館協会は、同お知らせ（5月13日付）において「公衆送信権等を一般的に、あるいは、恒久的に制限するよう求めているものではまったくありません。新型コロナウイルス感染症の拡大防止策として行われている緊急事態宣言のもとでの、特例的・時限的なお願いであると位置付けています。」と強調している。

その後日本図書館協会は、「読み聞かせでよく用いられる著作リスト」の提供を児童青少年委員会⁽⁴⁾に依頼し、5月13日の当該協会のHPのお知らせにてそれを公表した。また、日本図書館協会は2020年5月14日にさらに20団体に協力依頼を送付した。7月17日に当該協会HP⁽⁵⁾お知らせにて同リストに対する公衆送信権等に関する許諾が48冊中、5冊⁽⁶⁾出たと報じられた。

ゼミで行うリモート読み聞かせに関する絵本については、8月上旬の開催を念頭に7月上旬から9件の読み聞かせに向く絵本について米沢女子短期大学の北口ゼミとして、個別に出版者に許諾を求める依頼（メール添付による）を行い、許諾を頂いた6件の絵本について利用することとなった。時期が合わなかったため、許諾の出た前述の5件の絵本については、使用しなかった。リモート読み聞かせに関する絵本許諾の依頼のポイントとしては、1) インターネットを介してウェブ会議システムを利用したリアルタイム（同期型・同時双方向）方式で行うこと、2) 学童保育所の生徒という対象者が限定されていること、3) 読み聞かせの配信回数は2回であり回数が決まっていること。その結果、以下のような回答があった。

A社：出版者の事情としては、趣旨は理解できるが一律にお断りしている。

B社：依頼のポイント上記1) 1) 3) を遵守することを条件に時限的に許可するが、当該絵本についてリモート読み聞かせの許可が下りたと、読み聞かせの場以外では、公言しないでほしい。

C社：許諾を求めた絵本について許可。

このように対応が様々で出版社自体も公衆送信権についての対応に統一した見解を示すことに困難を感じていることが分かった。また、今回許可が下りた絵本に関して、コロナ禍における今回の両日のリモート読み聞かせに対してのみの許諾であるため、今回の事例で読み聞かせを行った絵本が今後も公衆送信権に制限のある絵本との認識はしてはならず、リモート読み聞かせで使用する際は、再度の許諾申請

と許可が必要な点は注意が必要である。

2-2 リモート読み聞かせの米沢女子短大「北口ゼミ」における実践

2-2-1 今年度「北口ゼミ」

今年度前期のゼミは新型コロナウイルス感染症拡大のためスタートが遅れ、1年生は6月2日より、2年生は5月13日よりそれぞれ遠隔形式でスタートした。リモート読み聞かせの取り組みについては、1年生の「教養ゼミ」、2年生の「図書館文化論演習」で行った。まずは、1年生の「教養ゼミ」ではまだ実際に会ったこともないため、自己紹介を行った。3回分の遠隔については、絵本について講義をおこなったり、学生同士好きな絵本について発表を行ったりした。対面での授業が7月に入ってスタートすると、対面での3回分は、オリジナルのお話やクイズを考えたり小道具作成を行ったりした。一方、2年生は、1年次に北口の「教養ゼミ」を受講し、対面での学童への読み聞かせに行った学生が13名中6名いた。そのため、読み聞かせの対応は慣れている学生が多かった。

リモート読み聞かせの本番前には1,2年生ともにリハーサルとして講義室を学童の部屋に見立て、1グループずつ、北口研究室より、リモートでのお話と読み聞かせの練習を行った。お話の配役ごとにセリフを言うこともあるため、配信を行うグループはフェイスシールドを装着し、感染予防と聞き手への顔の表情を妨げない配慮の両立をはかった。グループでの配信が終盤に近付くと、配信しているグループの内の一人が次のグループに知らせに行き、距離を保ち待機を行い、スムーズな進行を心がけた。

2-2-2 リモート読み聞かせの準備

今回のリモート読み聞かせは以下のスケジュールに行うことになり、準備を進めた。

短大学生数：1年生12名、2年生13名

日時：短大1年生2020年8月4日16時半～17時

短大2年生2020年8月5日13時半～14時半

対象：松川小学校学童「風の子クラブ」1～3年生 約25名（途中で迎え等で抜ける場合があった）

また、リモート読み聞かせの環境は以下の通りである（全て筆者が準備のうえ設置）。

聞き手（学童側）：ノートパソコン、モバイルWiFiルーター、プロジェクター、スクリーン、WEBカメラと付属の三脚、スピーカーフォン（すべて各1つずつ）。

話し手（学生側）：インターネットに繋がったデスクトップパソコン、WEBカメラ、スピーカーフォン（すべて各1つずつ）

このうち、最も気を使ったのはWEBカメラとスピーカーフォン（マイク機能含む）である。聞き手側（学童側）のプロジェクターでの投影に耐えうる画素数と双方共に枠内に収まるための広角レンズを有すWEBカメラ、及び読み聞かせの声を出来る限り鮮明に拾い、相手に届く機能を有すスピーカーフォンが必須だった。当時WEBカメラ、スピーカーフォンなどは欠品が相次いでいたが、7月頃には在庫状態になったことで、以下の製品を購入した。

WEBカメラ：話し手（学生側）1台（Logicool C920n）

聞き手（学童側）1台（Logicool C922n）

スピーカーフォン：話し手、聞き手1台ずつ（Anker AK-A3301011）

また、使用したウェブ会議ツールはZoomを採用した。当初はTeamsの会議機能で研究室と学童の教室をつなぐ予定であったが、事前のリハーサル時にTeamsの画面だと、中継先の様子のみになり、読み聞かせの配信状況が画面にどのように映っているのかが話し手は分からないため、画面のどこで演じたらよいか分からなくなることが分かった。Zoomだと、話し手は画面にて、自らの様子を見ることが可能であったため、Zoomを利用した。

2-2-3 リモート読み聞かせの状況

当日リモート読み聞かせの配信先である学童には教員1名のみで訪問した。教員の作業は主にPC環境の設定である。配信は北口研究室から行い、密を避けるため配信を行うグループの4～5名のみが研究室に在室し、配信の順番でないグループは通常の教室に待機とした。

そして、短大1年生12名を4名×3グループ、短大2年生13名を4名×2グループと5名×1グループに分け、1グループ5分程度の絵本の読み聞かせを含むお話をを行った。どのグループも学生自作の絵による背景やペーパーサート（割りばしで固定した紙の人形）を使用したお話やクイズ、及び出版社よりリモート読み聞かせの許可を得た絵本1冊の読み聞かせという構成で行った。

短大1年生

第1グループ：

オリジナルのお話『まるおくん まほうのりんごをもとめて～!!』、絵本の読み聞かせ

第2グループ：

オリジナルのクイズ、絵本の読み聞かせ

第3グループ：

オリジナルのお話『お腹がすいたあおむし』、絵本の読み聞かせ

短大2年生

第1グループ：

青空文庫よりグリムのお話『かえるの王様』、絵本の読み聞かせ

第2グループ：

グループで作成したオリジナルのお話『サリルの大冒険』、絵本の読み聞かせ

第3グループ：

グループで作成したオリジナルのお話『おかしなおばさん』、絵本の読み聞かせ

このうち、短大1年生は「教養ゼミ」が5限であり、学童では徐々にお迎えの時間にあたる16時半からであったため、対象人数は20名程度であった。お話や読み聞かせ中もお迎えが来ると子どもは抜けていったが、これは例年の対面でも同様のことである。また、昨年までの対面での読み聞かせ時は、グループごとに分かれて一斉にお話等を行っていたが、今回は学童側で密を避けるため、学生のグループが入れ替わる際に、学童の子どもも入れ替わることが可能と調整していた。しかし、夕方の時間帯で、子どもの数が少ないため、入れ替えは行わなかった。

また、短大1年生のプログラムにはクイズ等を入れ小学校低学年向けとし、短大2年生のプログラムはストーリー性のある長めのお話を入れ小学校中学年向けとした。当日の状況については以下のように幾つか特徴的な反応があった。

短大1年生の第1グループ：

オリジナルの話『まるおくん まほうのりんごをもとめて〜!!』というお話では、主人公のまるおくんがまほうのりんごを探す過程で、道を選ぶ際に児童に「みんなはどっちだと思う？」と語りかけを行い、間をおくと、児童から「こっち〜」など指差しや回答が見られた。また、まるおくんが最後に「バイバイ〜」と呼びかけると、児童も「バイバイ」と答え返していた。

短大1年生の第2グループ：

第2グループのクイズでは、まず材料を絵で提示して、それを使って何の料理ができるのか？というものがあった。学生が「ナルト、スープ、チャーシュー、麺、卵これで何ができる？」と問いかけると、学生が指名する前に児童から「ラーメン！」という回答が次々に上がって、盛り上がっていた。別のクイズでは、やはり絵を使用して、そこであらわされたスポーツ（手の絵に平仮名で「す」と描いたもの。答えは「テニス」）は何？という問いかけに、「こちらが当てるのでわかった人は手を挙げて！」と呼びかけると、挙手が多数あった。

これらのやりとりでは、学生と児童と双方に設置したWEBカメラを通じ、学生は「前にいる赤いシャツの子」など指名し、児童側にいる教員が、児童をスピーカーフォンの前に促して、回答させるなどスムーズな進行を心がけた。WEBカメラとスピーカーフォンによって、ネット環境さえ整っていれば双方向でのやりとりはス

ムーズであった。

短大2年生のグループ全般：

各グループオリジナルのお話に力をいれ、ストーリー性のある長めのお話になり、小学校中学年向けであった。しかし、インターネット環境が不安定で、Zoomの画面が固まったり、動画配信の速度の遅延が見られたりした。前回の短大1年生のプログラムより、お話をじっくり聞くタイプのプログラムだったため、インターネット環境の不安定さもあり、お話に集中できない様子が見られた。また、こちらで考えていたより低学年の児童が多いことから長めのお話に集中できていない様子も一部見られた。

学生の考えたプログラムの中では、上述のように短大1年生の考えたクイズに引き付けられていた。

2-2-4 リモート読み聞かせの課題、改善点

リモート読み聞かせを行う上での最大の課題は、ある程度予想はしていたが、双方向のやり取りが可能なインターネット環境の確保である。配信先の学童はモバイルWiFiルーターを介したインターネット環境であったためか、Zoomの画面が固まったり、動画配信の速度の遅延が見られたりした。配信元と配信先の双方で動画配信に耐えうる回線を確保することは、欠くことのできない条件である。また、学童職員からは、「通常の8月上旬であれば夏休み期間で、様々なアクティビティを準備しているところ、コロナ禍により中止になってしまった。児童間で密を避ける必要はあるが、外部との直接の接触は避けられるため、今回の読み聞かせは実施可となった」という意見が聞かれた。自粛により様々な活動が制限される中で、リモート読み聞かせは読み聞かせの代替手段として成り立つことが分かった。機材を準備する段階から、学童の児童は「今日はありがとうございます」と筆者に声掛けをしてくるなど、久々のイベントを楽しみにしていることが伝わってきた。

また、児童の反応としては、まずスクリーンの画面に興味津々の様子であり、集中してもらう、という意味では非常に効果的であった。

対面の読み聞かせでは、10名程度の児童に対し5～6名の学生で行っていたが、リモート読み聞かせでは、スクリーン上に大きく絵本を映すことで、1冊の絵本について、対面時の3倍数程度の児童が楽しめるため、読み聞かせを大人数に届けるにはリモート読み聞かせは有効である。しかし、画面全体に絵本を映すことで、読み手の顔は画面に映らない。また読み手側は、児童が読み聞かせを聞いている様子全体はZoomの画面よりわかるが、児童側は、読み手の顔は見えないため、両者の自然なアイコンタクトが行われぬ点は課題である。読み手側のリモート読み聞かせならではの工夫としては、画面における絵本と自身の顔の位置関係に気を配る必要と、意識してwebカメラを見ることがあげられる。そうすれば通常の対面のお話

し会に近い雰囲気になる。また、声の出し方としては、通常は肉声で全体にいきわたるように出すが、リモート読み聞かせでは、スピーカーを通すことになる。スピーカーフォンについては、マイク機能含むものを用意し、手ぶらで利用できるようにした。

オリジナルのお話については、著作権法上の公衆送信権の問題をクリアするため、急遽作成することになった。そのため、今回はストーリー作成とお話の小道具（紙芝居仕立てや紙人形作成）を完成させることで精一杯であったが、時間的制限の中、それを完成させた短大生の頑張りには敬意を表したい。

今後の課題としては、安定したインターネット環境を整備することは勿論、対象の児童の理解に合わせてお話の長さや表現を改良する余地がある。

3. まとめ

今回急遽実施したリモート読み聞かせを振り返ると、予定外の事であったため、準備不足は否めず、実施できなかった対面の読み聞かせの補完という枠は超えられなかった。例えば、通常の対面での読み聞かせ時は、プログラムが終了した後に、絵本やお話に使用した自作の簡単な絵本などを囲んで、学生と児童の自然なコミュニケーションが生まれていた。今回は、画面を通しての交流であるため、実際に絵本や小道具を児童は手に取れないため、そこからコミュニケーションが生まれることがなかった。また、読み聞かせに使用する絵本についても、出版社からの許諾を得る必要があることから、通常は学生が一人1冊読むところを、グループに1冊に限定されてしまったため、児童に多数の絵本の読み聞かせを届けることはできなかった。これらの点では、対面に敵うものはない。

しかし、今回のリモート読み聞かせは、ネットにて一方向に配信されるオンデマンド方式ではなく、リアルタイムで行ったため、読み手と聞き手の双方向性は維持された。読み手と聞き手の相互作用があるため、読み手の呼びかけによって聞き手を画面の方に集中させたり、児童は特に自分たちが画面に映ると想像以上に盛り上がったため、リモートならではの盛り上げ方の工夫により、やり方次第では対面の補完に終わらない可能性を感じられた。また、コロナ禍におけるような感染予防策が必要な場合は、安全に児童にお話を届ける手段である。そのためアウトリーチサービス⁽⁷⁾として図書館利用に支障がある入院している子どもにリモート読み聞かせを行うことは良いアイデアであろう⁽⁸⁾。これはリモート読み聞かせが代替的な位置づけでなく、図書館における子どもの入院患者へのアウトリーチサービスとしては代えがたいサービスになる可能性があると言えよう。例えば、オリジナルのお話をさらに対象の子どもに合わせた形に改良し、これまでサービスの及んでいないと考えられる病院などを対象にリモート読み聞かせを行うことなどが考えられる。

以上のように、リモート読み聞かせの試みは各地で様々な形で行われているが、

著作権、設備、インターネット環境、話し手の技術的課題、聞き手のニーズなど検証が必要な点が多数存在する一方、リモート読み聞かせならではの可能性も感じられた。今回のリモート読み聞かせをもとに、授業のみならず、公共図書館も含めて更なる実践を展開していきたい。

(注1) 現在YouTube上で多数個人による公刊済絵本の読み聞かせ動画が配信されているが、著作権許諾申請をしていないと思われるものが多い。

(注2) 日本図書館協会とは、前身は「日本文庫協会」といい、1892年3月に設立された日本の図書館を代表する総合的な全国組織。(http://www.jla.or.jp/jla/tabid/221/Default.aspx 参照2020.10.31)

(注3) 日本書籍出版協会(略称「書協」)は、1957年3月に181社が参加して、出版事業の健全な発達、文化の向上と社会の進展に寄与することを目的に創立された団体。(https://www.jbpa.or.jp/outline/about.html 参照2020.10.31)

(注4) 児童青少年委員会とは、日本図書館協会の中の委員会で、公立図書館の児童青少年サービスの向上・発展のために、さまざまな活動を行う。

(注5) http://www.jla.or.jp/home/news_list/tabid/83/Default.aspx?itemid=5379

(注6) この5冊とは、岩波書店『かにむかし』木下順二 文、清水崑 絵

岩波書店『きかんしゃやえもん』阿川弘之 文、岡部冬彦 絵

瑞雲舎『ことばのこぼこ』和田誠 作絵

童心社『ウラパン・オコサ -かずあそび-』谷川晃一 作

童心社『じごくのそうべえ -桂米朝・上方落語・地獄八景より-』田島征彦作である。

(注7) 図書館サービス圏内において、図書館を利用しない人、あるいはなんらかの理由で来館しない人にまで図書館サービスを拡張していく実践のこと。高山正也他編著『改訂図書館サービス概論』樹村房 2019年4月 p.147

(注8) 「リモートで絵本読み聞かせ」小児病棟でコロナ対策 (<https://www.jiji.com/jc/article?k=2020053000136&g=soc> 参照2020.10.31)